

## 会津若松市幕内の民俗

倉石忠彦

- 一 概況
- 二 信仰
- 三 結婚をめぐる
- 四 生活暦の展開

### 論要旨

幕内の集落は城下町会津若松の近郊農村である。そのため日常生活においても町と密接にかかわっている。城下町の野菜場と呼ばれ、野菜栽培が盛んであったし、現在でも主要な生産物である。そしてかつては毎朝籠に野菜を入れて城下売りに行った。明治維新後は町分の田を手に入れ、水田耕作も大に行うようになった。現在そうした所は住宅地になり、幕内の農家もマシオン経営などを行い、生産者としてではなく、経営者としての一面をも持つようになった。いずれの時代においても村の外の世界と深くかかわってきたことができる。そのために社会の動きに敏感であり、進取の性格が濃く、学問に対する関心も高かった。そこに『会津農書』などがまとめられる基盤もあった。

村の信仰生活においては、新城寺（浄土宗）の果たす役割は大きく、また稲荷信仰も目立つ。二本木稲荷を祀り、屋敷神として稲荷を祀る家も多い。またかつては金毘羅講・古峯ヶ原講も盛んであった。そして男性の伊勢参り

仲間・女性の会津めぐり仲間信仰だけではなく、日常生活におけるつきあいの上でも大きな役割を果たした。

新しく来た嫁はこの会津めぐりの仲間に入って新たな村の生活を始めた。嫁の披露としては一月十二日の祭文語りの折に盛装して列席することによってもなされたが、その生活は家事だけではなく、野菜の生産と販売などにも大きくかかわった。

生活の展開は畑作物の生産が基盤になり、一年中畑の仕事があった。また十日市・エビス講など、町とのかかわりが生活の展開の大きな目安ともなっていた。

会津地方という地理的条件はもとよりその生活を大きく規制していたが、それにもまして都市近郊という条件が、幕内の生活を規制しているように思われる。

## 一 概 況

幕内は城下町会津若松の近郊農村である。近年は工場の進出及び住宅地として戸数も多くなり、幕内地籍は西幕内・幕内・東幕内の三区によって構成されている。このうち古くからの集落は幕内であり、西幕内はかつて川原であった所で、昭和三十四年に工場が進出し、現在は工場群が建っている。

古くからの集落である幕内は本村ともいわれ、四九戸で戦前はカミ(上)、ナカ(中)、シモ(下)の三つに分かれていたが、戦後隣組制度などといって五つの組に分けられた。各組は大体一〇戸程からなっている。この組は主として行政の連絡網や集金・納税組合などとして機能している。このほかに農協・婦人会・檀徒の集まりなどがある。ムラ中の人が集まるのは、村会・婦人会・お寺の百万遍などである。

またダシアイモチの時には、上・中・下それぞれに男は男、女は女で集まって餅をついて食べた。一人について茶碗一杯とか、何合とかと決めて米を出し合って餅をつくのダシアイモチというのである。二月と十一月の各八日に行った。宵のうちに米を集めて水に浸けておき、翌日は朝飯を食べずに集まって餅ふかしをして餅をついて食べた。ヤドは回り番で一回に二軒が当たった。三十三観音の掛け軸をかけて餅を供えてお参りし、その前で皆で餅を食べた。餅はきなこ餅・あんこ餅・なっとう餅・つゆ餅(雑煮)などを作った。タドコその他所の部落ではオカンノウ

コウといっていた。

ムラの中のつき合いは、こうしたいわば行政的なつき合いのほかにいくつものつき合いがみられる。そうしたつき合いの様子を木村弥家を中心にして概観してみよう。

まず本分家関係があり、木村弥家は木村龍介家の分家であり、大原甲家は木村弥家から大原家をつぐということで入っており、分家のつき合いをしている。こうした家には正月に年始に行くが、それ以外の家にも行く。例えば阿倍平家は血縁でも本分家関係でもないが、昔から世話になつている家だからというので年始に行く。昔いろいろな機械が出始めた頃、長谷川吉次家と共同で発動機や靱摺り機などを買った。しかし巧く使いこなせなかった。その時阿倍平さんの親の平馬さんに頼んで機械を使う仕事してもらった。平馬さんは身体も丈夫で力もあり、機械を使うことが巧かったのである。ムラの東の倉庫のところに昔は精米(所)があつて、ムラ中で米を持って行って米搗きをしてもらった時期もあつた。木村弥家だけではなく、ムラ中の家が世話になつたといつてもよい。このほか姻戚である積田亀治家・佐瀬林之助家・佐瀬喜彦家・木村サダ家などにも行く。また上野正夫家はニシノウチと呼び隣としてのつき合いで年始に行くという具合である。年始はモチノショウガツの十五日頃迄というが、実際には一月いっぱいに行けばよいとされている。年始を受けた家では男なら酒肴でもてなす。卵あげ・かまぼこ等の盛り合わせ、豆数の子、ごぼりの煮たもの、田作り、昆布のお煮しめ、なます(にんじん・大根、大根の代わりに今は糸こんにゃくを使う)、煮魚、刺身な

どが年始の時（正月）に出される主な御馳走である。

結婚すると男は伊勢参り仲間を作り、女は会津めぐり仲間を作る。また嫁の初産の時には安産の歌詠みをし隣近所のムラシンルイが集まる。婚礼の時には料理人を頼んだりする。こうしたつき合いの様子を表にしたものが表1である。親戚などを中心しながら、ムラ全体にわたって、かなり多様なつき合いがみられる。

さて、この幕内は近世から城下町の野菜場として野菜栽培が盛んであった。「百姓百いろ」といって様々な野菜を作り、その種類は各家で相違するほどであった。そうした野菜類は郭内と呼ぶ城下に売りに行った。女はショイカゴに八貫目から一〇貫目程入れて背負い、男はヒラカゴに入れてテンビンでかついで行き、小秤で計って売った。朝四時頃に家を出て、昼前に売ってしまった。その時に注文を受けたものがあれば午後届けた。年輩の者はあまり行かず壮年の者が隔日くらいに売りに行った。冬はサルッパカマ・ジュバン・ドーフク・ハンテンにオソフキワラジをはいていった。夏はサルッパカマ・ジュバンでワラジをはいていった。各戸でだいたい得意先があり、それは近世では侍屋敷であり、その後もお屋敷であった。こうした野菜売りをアサウリといった。また昭和の初めまでは町の小売店に野菜をかついで行って売ったりもした。

野菜を買い集めて東山（温泉）へ持って行って売った人もあった。しかし売り上げが酒代になってしまうこともあり、家をつぶした人もあった。そうした人は知人や近所の人が仲立ちで部落内の人に家を売って、九州や北海道へ行った。そしてこのようなツブレヤシキの姓を名乗ることもあった。

昭和初期に出荷組合ができた。各家の野菜を夕方集め、若い者が順番で自動車で郡山に運び、翌朝一番の市場のセリにかけた。帰りには伝票と現金を貰って来て会計に渡した。各家では会計の所にお金を貰いに行った。しかしこれは昭和十年に問屋ができて消滅した。戦中には問屋は丸合・山平・一印・丸果などのグループごとに四カ所に市場を作った。昭和四十年以後は市からの要請で合同市場にした。その結果丸果と山平が残り、その市場ごとに出荷組合ができている。丸果は組合員の家を回って生産物を集荷し、山平は生産物を自動車で市場へ運び込む方法をとっている。

幕内では畑作だけではなく水田耕作も行っている。明治維新後侍屋敷のあとが水田になり、これを町分の田といい、大手門の所から堀の水をひいていた。この田を町の金持が所有していたがそれを借りて耕作していた。馬を曳いて仕事をしに行ったものである。後に戦後の農地解放で自分のものになり、住宅地化した現在ではマンションを建てたり、貸したり、あるいはそこを売って北会津地方に代替地を求めたりしている。その結果、現在では耕作している農地は畑と水田が半々で各戸平均三町歩ほどあるという。しかし農業の機械化により労働時間は短縮し、市中に勤務する若者が増加し、専業農家は減少している。だが換金作物の栽培は以前にも増して盛んに行われており、かつての農閑期であった二月、三月もハウスの苗床作りに追われている。都市近郊農村の特色は現在でも濃厚であるといえることができる。

そうした性格から下肥の汲み取りもかつては盛んであった。毎日、荷

表1 幕内のつき合い(木村弥家の場合)

組	番号	氏名	昔の組	関本 分家 係	関姻 係威	行年 始に 家	間伊 弥勢 氏仲	間伊 意子 勢仲	仲会 津巡 り	仲会 津巡 り	安産 ワタ ミ(姑)	オリ ヨウ リン の母	組納 合税	
1組	1	阿倍平	上	17分		◎								
	2	鈴木平	上											
	3	米田常	上							◎				
	4	鈴木喜	上							◎				
	5	長谷川喜	上								☆			
	6	鈴木善	上							◎				
	7	長谷川久	上							◎				
	8	上野吉	上							◎				
	9	鈴木与四	上							◎				
2組	10	長谷川兵	上	45本 1本										
	11	長谷川庄	上							◎				
	12	長谷川吉	上											
	13	長谷川英	上					◎						
	14	長谷川庄	上											
	15	関場喜	上								☆			
	16	阿倍長次	中						☆	◎	☆			
	17	阿倍静	中											
	18	木村幹	中											
	19	横田克	中											
20	横田亀	中			◎	◎								
3組	21	大原甲	中	24分	◎	◎		☆	◎		◎	◎	◎	
	22	上野力	中				◎	◎	☆	◎		◎	◎	
	23	上野正	中				◎		☆	◎		◎	◎	
	24	木村弥	中	27分			●	★	●	★	●		◎	
	25	佐瀬伝	下									◎	◎	
	26	佐瀬林	下			◎	◎	◎				◎	◎	
	27	木村龍	下	24本 32本		◎	◎	◎				◎	◎	
	28	木村直	下				◎	◎					◎	
	29	木村八	下							◎			◎	
4組	30	本井榎	下	28分										
	31	木村勝	下			◎	◎			◎		◎		
	32	木村サ	下						☆	◎	☆			
	33	野中勉	下								☆			
	34	小沼	下							◎◎				
	35	佐瀬永	下											
	36	小沼忠	下											
	37	佐瀬四	下											
	38	永井隆	下							◎				
	38	佐瀬文	下											
40	佐瀬岩	下												
5組	41	佐瀬喜		26分	◎	◎					◎			
	42	木村豊												
	43	木村三								◎				
	44	長谷川照								◎	☆			
	45	阿倍光			16分									
	46	長谷川鉄										☆		
	47	横田三												
	48	唐木力												
	49	谷沢次												

車にコエダルをつけて大便・小便を町に汲みに行った。だいたい一キロ半くらい離れた元町へ行くことが多かった。汲みに行く家は代々決まっていた。荷車一台にコイオケ五、六本つけて運んだが、テンビンでかつぐ人もいた。朝食前に二荷くらいかついだ。これらは五尺ツボと呼ぶ五尺四方のツボにあけておいた。こうしたツボは一軒で五、六個あった。テンビンでかつぐ時には、ナカツギといって、三人くらいで次々とリレ―する方法もあった。

こうした下肥のお礼には家族の人数に応じて、小便の礼としてはタクワン漬けを、大便の礼としては米をやった。

野菜は土質によって作るものが違う。土と砂とがうまく混っている所をヨナといい、大根・じゃがいも・にんじん・さといもなどを作る。土ばかりの所をツチムチといい、こうした所にはかぼちゃ・きゅうり・トマト・なすなどを作る。

土をうなうなすることをクルメルというが、これらは鍬や馬耕で行う。鍬はアキが終わると近間の鍛冶屋が回って来て集める。サッカケをするのである。寒中に打った鍬は丈夫にできるといって皆が出した。鍬には名前が書いてあるので春の農作業が始まる前に配って歩いた。サッカケだけなので値段は新しい鍬の半値であった。

農家の中には一七、八歳の若者を奉公人として住み込ませている家もあった。二年契約で三月頃契約をする。盆・暮には小づかいを与え着物を作ってやる。そして奉公が済むと女性には嫁入り道具一式を持たせてやるし、男は嫁を見つけて式を挙げてやる。こうした奉公人とは生涯親

子のつき合いをし、嫁呼ばりをしてやるし、葬式や祝い事の時には手伝いに来る。

若者たちは若者衆と呼ばれる集団を作っていた。各家の長男だけで構成され、高等科二年から三〇歳までが会員である。三月十日に金毘羅神社の前に寄合ってお神酒を飲むが、この時新入会員は会長からお神酒をついでもらって飲む。これが入会であり、退会は十一月八日頃である。

二五歳以上は年長組でオマエと呼ばれる。この中から会長・副会長・会計（二名）が選ばれる。二五歳以下は若者でニワと呼ばれる。毎月順番でヤドを務めた。長雨の時などにはダシアイモチといって米を出し合っ

て餅つきをした。若者衆では野鼠駆除や田植過ぎには井戸替えなどをした。また休み日を決めた。一月十五日にはサイノカミを作った。藁を各戸から五束ずつ集め、ムラマイデに作った。昭和二十年頃までは若者衆（青年会）が主催して四月十日から十五日頃、商人を頼みムラ中を神楽が回り、最後に寺で納めた。

こうした幕内は、常に町とかかわりを持ちつつ社会の変化に敏感に反応し、それに対応しようとしてきた。それは城下町の野菜場として近世以来培われてきた性格であるともいえる。以下、そうした幕内の民俗の一斑を生データの羅列する形ではあるが、概観することにする。

一一信 仰

熊野神社

幕内の氏神は熊野神社である。祭神は伊邪那岐命・熊野皇太神・速玉男命・事解雄命で相殿に建御名方命・倉稻魂命を祀る。

境内には厩山（文化己巳六年）・湯殿山（文政十二年己丑六月吉日）・飯豊山（慶応三丁卯八月）・水神宮（応永二己酉年）・巳待供養（宝曆三癸酉年三月吉日）の碑がある。

氏は幕内の各戸であり、役員は地付きの年輩者で三人が任期三年で選ばれる。この人たちは祭りの段どりをつけ御神酒を買う。またお供えの準備をして太夫様に届ける。太夫様は住吉神社の神官である。供物は魚・すめ・米・塩・水・野菜である。祭りの時には神社に五反職を立てる。氏が集まって立て、後に御神酒を飲む。

祭日は元旦祭・九月九日の祈願祭・二十十日祭・勤労感謝祭などがある。九月九日は九月節供で、この日に行われた熊野神社の祭りも、後には新城寺の延命地藏の縁日である八月二十四日に行われるようになり、この時には「御祭礼」の幟を立てるようになった。

新城寺

幕内には新城寺（浄土宗）という寺がある。上組はもと会津若松の寺町にある真言宗の寺の檀家になっていたが、住職が博奕をして寺を取られてしまったので檀家の人たちは新城寺の檀家になったという。しかし

幕内全戸が新城寺の檀家というわけではなく、例えば日新町の大運寺（浄土宗）の檀家である家もある。

新城寺の責任役員として、大檀頭三軒（長谷川吉次氏・木村八蔵氏・佐瀬林之助氏）があり、このほかに回り檀頭が六軒ある。回り檀頭は順番で務め一切祭りをすることになっている。大檀頭は檀家の過去帳を保管するほか、埋葬許可証の保管・火葬許可証の綴りの保管をする。また昭和四十四年には新城寺墓地使用規則を定めその実施に当る。

回り檀頭には檀頭長と会計の役があり、毎年十二月一日にユズリコンといって檀家名簿を次の檀頭に渡すことになっている。そして年末には各戸に寺志納を割り当てて徴収する。

新城寺の墓地を買うことのできる人は、新城寺の檀徒で、幕内に地所を買って住みつく人、幕内の人の子供、伯叔父母、あるいは先祖が幕内の人などで、現在一間四方で八万円程である。墓の境界や埋める場所は大檀頭が立合って決める。

カロウトは昭和四十年に火葬になってから作り始めた。火葬の骨を納めるための墓である。しかし、焼かれるのは熱いからいやだという人がいて、今でも土葬をすることがある。

新城寺ではかつて一月二十六日に大般若を行っており「大般若入用帖」などが残されている。

二月一日には百万遍をする。大きな珠数を外向き内向で二重に回す。南無阿弥陀仏を唱えながら珠数を回し大きな玉が来るといだけ。一戸から一人ずつ出て、女衆は重箱持参で団子を持って集まる。終わるとホ

ウジョウサンの話聞く。檀頭・総代・女衆・子供などが集まる。

八月二十日はオヒガキ（御施餓鬼）で無縁塔・無縁仏を祀る。この時に祀られる無縁仏は三年以上かまわなかった墓、あるいは子孫が拝みに来なかった墓である。

## 二本木稲荷

幕内で祭る祠として二本木稲荷がある。白狐を祀るという。かつて葦名が鶴ヶ城を築こうとした時に、この稲荷に願をかけ、その結果雪の上について狐の足跡をもとにして城を作ったと伝えている。その時の狐を祀ったものだという。

二百二十日が二本木稲荷の祭り、この日をヨイマツリといい、稲荷の所に旗を立て、夕方稲荷に重箱を持ち寄り、住吉神社の太夫を呼んで祭りをしたあと、皆で食べる。安全祈願・豊作祈願である。

稲荷は各戸でも祀る。カミサマに方角を見てもらってその方角に祀る。豊作を祈るほか何でも願いごとをかなえてくれるという。

初午には稲荷を祭る。二本木稲荷には白と赤の旗を立て油揚げ・お神酒を供えるほか、豆とアカゴハンをおひねりにして供える。お城の稲荷にお詣りする。またこのとき七カ所の稲荷を巡拝してマメイリとアカゴハンのおひねりを供える。

佐瀬寿江さんは自分の家の屋敷稲荷をお詣りした後、佐瀬伝治家の稲荷・長谷川善雄家の稲荷・鈴木平真家の稲荷・米畑常雄家の稲荷・熊野神社境内の稲荷・二本木稲荷の順に巡拝する。

## 金毘羅様

幕内の上と下の中間の所に金毘羅様の石碑（金毘羅山、文化六己年二月吉）が建っている。この祭りは上と下とが合同で行う。三月十日にムラの人たちが集まって「金毘羅神社」と書いてある幟を立て、住吉神社の太夫に来てもらって御祈禱をあげ、後に御神酒を飲んだ。この行事は終戦頃には行われなくなった。金毘羅講として代参するというようなことはなかった。神指村の高久に阿賀野川の船着き場があったりしたので、金毘羅信仰が入ってきたのではないかなどといわれている。

金毘羅様の祭日であった三月十日は陸軍記念日だったので、終戦前迄は子供たちが兵隊ごっこをして遊んだ。村中の子供たちが南北に分かれて行った。鍬ガラの柄の先に花火をつけて鉄砲の代わりにした。参加したのは小学生から高等科二年までの男の子たちで年齢順に位をつけた。高等科二年生が大将で肩章をつけた。ゴム靴をはきモンペ・ハンテン姿で学帽をかぶってとっくみ合いをした。

## 古峯ケ原講

上と下にそれぞれ古峯ケ原講の石碑が建っている。上組は組の南端に建っている。「古峯神社 上之組講中 明治三十五年八月吉日」とある。下組は川の端に建ち「古峯神社 秋葉神社 講中安全 大正三年申寅二月建」とある。

講は上と下の二つの組に分かれている。下の組では正月十日市が済んでから代参した。トウモト制といい、年番で当番を務めた。代参はクジビキで決めた。八人ずつが組になって二泊三日の予定で代参した。四年

間で全員が行くことになる。費用は毎月積み立てた。帰ってくると当番のヤドの家に集まり古峯ヶ原のお札を配った。代参のクジビキはこの時にした。代参は上の組と一緒に行く時もあれば別の時もあった。代参は戦後しばらくして中止した。しかし現在でも栃木県鹿沼市の古峯神社からお札は受けている。

戦前までは春先に講中の人が古峯ヶ原の碑の前にムシロを敷いて集まり祈願をあげた。

この講は火伏のためのものであるが、かつて戊辰戦争の時に幕内が火事になったという。秋葉神社も共に祀るがフタトコ(二カ所)かけるのはめんどろだからといって秋葉神社へは行かなくなった。古くは両方へ行っていたようだという。

#### 伊勢参り仲間

男衆は結婚してから伊勢参り仲間を作った。仲間が何人か集まるまで何年も待つこともある。木村弥氏は昭和十六年に仲間と伊勢参りに行った。出発前に隣近所の人を招いた。招かれた人たちはワラジセンを持って来た。伊勢参りの日程は一週間くらいであった。当時は新潟経由であった。米を持って行った。ワラジセンをいただいた人には帰って来てもらいただいて来た伊勢のお札を配った。伊勢参りに行くと天照皇大神と書いた掛け軸を買ってくる。そして正月初詣の参拝に行ってくると出して飾り、十三日まで飾っておいた。

伊勢参りに行くのは正月明けか正月前に出かけることが多かった。仲間の年齢は上下一〇歳近くの差があるが、同級生などとは違ったごく親

しい存在として終生つき合う。互いに精神的な支えとして存在した。セツに集まって飲んだり、春の花見をしたり、秋の稲刈りが終わるとイモニ(里芋やきのこを採ってきて煮て食べる。今は仕出し屋で行い、後にカラオケに流れたりする)をしたり、旅行や温泉に行ったりする。仲間が亡くなるとお参りに行く。その人が亡くなると仲間とのつき合いはおしまいになり、次の代の者が代わりに仲間の行事に参加するようなことはない。しかし、香典をもらってあったり、お参りに来てもらったりしていると、そうした人が亡くなった時には妻や息子が線香を立てに行く。伊勢参り仲間は現在でも行われているが、内容に多少の変化がみられる。佐瀬壮江氏は昭和四十五年に夫婦で伊勢参りをした。この時には一〇組の夫婦が一緒であった。この時同行した夫婦は伊勢参り仲間であるとして、毎年二月八日に仲間温泉で遊びに行っているという。

#### 会津めぐり

男の伊勢参りと同じように、女も嫁に来ると会津めぐり仲間を作って三十三観音をめぐって歩きウタヨミ(御詠歌)をあげる。同じ頃嫁に来た人が仲間になる。嫁様が五、六人たまると行ったが、Aさん(昭和八年結婚)の仲間は二〇人余りもいたので上と下とに分けていった。Bさん(昭和二十年結婚)の仲間は一三人であった。男の先達(ムラの中のオトツツアマ・オジサマ)を頼み、芦ノ牧温泉などに泊まって車で回って歩いた。回る時には参加者全員の氏名を墨で紙に書いて、各寺院に奉納した。また回り終わると額を作って寺に納めることもあった。安産を祈願したり、子育ての無事を願ったりした。



仲間には死ぬまでつき合う。無尽をしたり、旅行に行ったり、温泉に行ったりして楽しむ。昔は農閑期にダシアイモチをしたりもした。

仲間の年の差は一〇歳くらいで、若い頃には年上の人がオヤカタになって世話をし、年取ってくと逆に一番若い人が世話をするようになる。旦那が亡くなくてもお参りに行ったりする。仲間が亡くなった時にはもちろんお参りに行き御詠歌をあげてくる。本人が既に亡くなってしまっている時には、嫁が香典を持ってお参りに行き、それでつき合いが終わる。

女性のかかわる仲間としてはこのほか安産のウタヨミをする仲間がある。初めて出産をするために里帰りをする際に、隣近所のムラシンセキが集まってウタヨミをするのである。女たちが集まって三十三観音の御詠歌を詠んでもらってから里帰りをした。ウタヨミが済むと一番年上の女性が妊婦の腹をなでて安産であるようにと祈る。詠んでもらった家では酒やお茶を出し、嫁がお酌をしたり、お茶をついだりする。この間、男は何処かへ行っていて、顔を出さない。

### 飯豊山登拜

男子は一三歳になるとイトヨサン（飯豊山）に登った。一三歳から一五歳までの三年間行り。夏休みに年配の人が付き添い白装束で登った。まず氏神である熊野神社に三日間オコモリした。この期間、朝・昼・晩と三回大川（阿賀野川）でコオリトリ（垢離取り）した。それを済ませたから出発した。朝の一番列車に乗り山都駅で下車し、モリガミネあるいはハチノウチで一泊した。朝食前に飯豊山頂で御来光を拜む。朝食を

済ませると下山し、夕方に若松に帰る。この夜は熊野神社で一泊する。朝、大川でコオリトリをし、午後新城寺で集まった子供たちにコノハガシ（御供）を配った。お山（飯豊山）からは木・石などを持ってきてはいけないとされていた。この禁を破ると身体が動かなくなるとされている。この登拜は昭和十六年まで行われ、戦後復活し昭和三十年頃まで行われた。

なお小学校に入學した男の子は高等科を出るまで子ども組に入った。一月十五日のサイノカミを作るために、三日前にトンショに空納豆の苞を集めたり、三月十日に大川の川原で戦争ごっこをしたりした。現在は子供会で、元旦の初詣ができるように、寺と神社の間のユキフミをする。低学年の子はフカグツをはき、高学年の子はユキフミダワラをはいてユキフミをする。

かつて女の子は小学校を卒業すると、お針（裁縫）を習いに行った。会津の町々にはお針のお師匠さんたちがいた。後には洋裁学校に行くようになった。また行儀見習いに行く子もいた。

### 二二 結婚をめぐる

結婚をめぐる女性の生活は、昭和十年代においては大略次のような状態であった。

#### 縁談

縁談は親同士で決めることが多かった。家に年頃の娘や息子がいると、

親戚や知人が話を持ち込んでくることが多かった。話があると相手の家の近所に行って、相手の人柄や家の状態などを聞く。相手の人柄もよし、家もよしということになると見合いをする。見合いを申し込む時には、すでに結婚することが決まったようなものだから、仲人を立てて、もらう方が娘の家に申し込みに行く。当人同士が会うのはそれからであった。映画館の前などで待ち合わせたりして、映画を見るくらいのものであった。戦前は、大工町にある会津館や神明通りにある栄楽座などが若者の憩いの場であった。

男は酒飲みでないこと、ぐうたらでなく、よく働くことなどがよい夫になる男としての条件であった。

### 仲人

話をかけてくれた人が親戚のオジさんだったり、隣のオトツツアマだったりした時には、そのまま仲人になってもらう。そうでない場合は、もらう方の身近な人になってもらう。昔は、ムラシンセキがたくさんあったので、そういう家の中の一軒に頼んだ。ムラシンセキというのは、ムラウチで、本家・分家関係にある家や姻戚関係にある家をいう。仲人はもらい方で立て、嫁の世話をするのはナコウドオッカツアマである。なお、話をかけた人と仲人とが別の場合は、話をかけてくれた人をクチイレといい、サダメザケ・衣裳納めの世話もクチイレがすることがある。しかしナコウドを立てる時期は一定しておらず、見合いの時に立てることもあるし、婚礼の日取りが決まってから立てることもある。

### サダメザケ

もらい方・くれ方双方がよいということになると、サダメザケにする。日の良い日を選んで、仲人が婿の家から酒をあずかって嫁の家へ行き、嫁方で婚礼の日取りを相談して酒を半分飲んでくる。その後、婿の家に帰って嫁方の意向を伝えて、残りの半分の酒を飲む。この日は双方とも、伯叔父母・ムラシンセキなどと呼んで酒を飲んでもらう。この時の酒は赤い塗の角がついた酒樽に入れ、仲人だけが持ち歩いた。婿と嫁の家を往復するのは仲人だけである。

### 衣裳納め

婚礼のヨイの日(前日)、仲人が婿方から嫁の衣裳をあずかって行き、嫁方に納めてくる。今の結納に当る。品物と目録とを合わせて納めてくる。嫁方ではサダメザケに招いたような人々をこの日も招いてお祝い一杯飲んでもらう。エビ・カズノコ・するめ・豆(青いひたし豆)・煮た昆布を盛りつけた皿、魚(鮭などの焼き魚や煮魚)など三品くらいを酒の肴にして飲んだ。

衣裳納めに持っていく品は、家の経済状態などによって異なるが、Aさん(昭和八年結婚)の場合には次のようなものであった。

江戸褌・夏用の紹の江戸褌・喪服(夏・冬、黒と白とを合せて)・小紋二枚・大島二枚・錦紗二枚(併せて三重)、腕時計・蛇の目傘一本・履物(足駄・ツマカケ・蒔絵のかかった駒下駄)嫁に来る時履いた駒下駄など)など

衣裳納めに持っていくものは、着物は末長くいるようにと長着だけで、羽織などのハンパモンは納めるものではないといわれた。また、履物も

嫁の家からは持つてくるものではないといわれていた。嫁の家では、衣裳納めにもらうものを予め仲人に聞いてもらっておき、それらの着物に合わせて帯を作ったり、羽織を作ったりして準備をする。嫁の家ではこれらのもののほかにも、簞笥や長持がいっぱいになるように着物や布団を用意しなければならないので、娘のいる家は経済的な負担が大変であった。これだけの物を持つていかなければならないということはなかったが、衣裳納めにたくさんもらえば、それに見合っただけのものを嫁の方でも用意しなければならなかった。だからおおよそ家の釣り合いというものもとれていなければつき合いがでなかつたのである。

## 婚礼

衣裳納めの翌日、婚礼が行われる。

まず、朝、嫁の荷物が運び出される。くれ方でムラシムルイの若い人を頼んでかついで運ぶ。道中の半ばまでもらい方の若い人たちが迎えに出て荷物の受け取り渡しをする。もらい方で重箱に酒の肴を用意して、道端で長持唄をうたって一杯やりながら荷物と目録の受け渡しをした。荷物をかつぐ人をナガモチカツギといい、その中の責任者をニカキサマといって、これは少し年配の人が当った。ニカキサマは鏡台を唐草模様の風呂敷か家紋入りの風呂敷に包んで背負ってきた。酒の肴を持つて先頭をいくのもニカキサマであった。

荷物を運んでいる間に嫁は支度をする。  
 婿は嫁の家に昼頃着くようにハナヨメムカエに行く。婿・婿の伯叔父母などが九人くらいで行列を作り、提灯を持つて嫁の家まで歩いて行っ

た。後にはハイヤーを使うようになった。嫁の家の方では、お膳を用意しておく。婿の一行が到着すると、座敷に通り膳につく。そして婿の伯父などが婿と親戚の者たちを紹介する。嫁の方ではオシヨウバンキヤクが出て、紹介を受ける。オシヨウバンキヤクは、嫁のおじいちゃん、おばあちゃんの兄弟が当る。

夕方、嫁・嫁のゲンザンキヤク（嫁の身近な人、伯叔父母・兄弟など）・ハナヨメムカエに来た婿の一行などが行列を作つて提灯をつけて婿の家へ向かう。嫁の一行はまっすぐ婿の家へ行かず、ナカヤドにおちつく。ナカヤドには隣の家などを頼んだ。嫁はナカヤドで餅などを食べて休む。婿の家の方の用意が整うとオツカイが来て、婿の家へ行く。

ゲンザンキヤクは座敷から入るが、嫁は仲人が提灯をつけてダイドコロから入る。ニワマワリという。ダイドコロから入った嫁は、茶の間などと呼ぶ今御飯を食べているあたりの部屋に座つて、アゲボシ（綿帽子）をとる。予めアゲボシトリの男の子を頼んでおいて、針だけ仲人が抜いてアゲボシは子供がとる。その時、回りで見ている大人たちが「いねいね ばいた（化けた）」といった。アゲボシで角を隠して来た嫁が、アゲボシをとつて本当の姿に化けたという意味であるらしいという。

アゲボシをとつた嫁は、次の座敷（中の間）へ行つて盃をする。三三九度の夫婦盃、家族の者一人ひとりとの盃などをする。サケツギの男女の子供がお酌をする。サケツギは、親戚の三歳か四歳くらいの子供で、男の子は紋付きに袴、女の子は振り袖を着てお酌をする。

盃が終わると嫁婿が床の間を背にして座り、披露宴になる。そこでも

う一度双方の親戚の紹介をする。手伝いに来て近所の人たちが呼ばれて来ている客にお酌をして回り、宴はたけなわになる。近所の人々が嫁さんを見に来る。

嫁は、江戸褌を着て、髪を高島田に結ってくる。Aさんは江戸褌の上に代々使っている振り袖をうちかけとして着た。下の着物が普通の袖だったから、うちかけと袖とが合わなかったと思うが、衣裳納めの時に持って来て、着て来るようにといわれたので、いわれたとおりにした。披露宴の頃合いを見計らって、嫁は中座して一番衣裳に着替えて、客に酌をして回る。一番衣裳は訪問着である。一とお酌をし終わると、今度はツウヤギ(大島などの普段着)に着替えて台所の仕事を手伝った。近所の女衆の仲間入りであった。全て仲人様が指示してくれる。

披露宴は夜の十時から十二時頃まで続いた。

#### キンジョマワリ

婚礼の翌日は、嫁がムラシンセキを回ってあいさつをして歩く。嫁は紫のぼかしの江戸褌を着て、髪を島田に結ってもらって、タオル一本くらいを持ってあいさつに歩く。オパンチャがつれていった。

#### ヒトモドリ

婚礼の翌々日はミツメといって嫁が里帰りをする。嫁だけが行く。一番衣裳の訪問着を着て髪をキクマゲに結った。お土産として菓子折くらいを持っていった。二晩泊まって、帰る時には実家の母親が送って来た。帰りは小紋を着て、着物に合わせた羽織を着た。嫁の母親はこの時初めて婿の家に来る。母親は、御馳走をいただいてその日のうちに帰ってし

まう。

家へ帰る母親を見送っていると、いよいよ一人になって本当に嫁に來たんだという気がして泣きたいような気分になったという。一七、八歳のまだ何も分からない子供が、まったく知らない人たちの中で暮らすのだから、それは心細いものだったという。

#### アシイレ

昭和十年頃まではアシイレが行われた。手間が欲しい時に、働く着物一式くらいを持って嫁が婿の家に行く。婚礼は来春や秋などに行うが、大体一年以内に婚礼をした。

#### 嫁の暮らし

朝は姑が起きる前に起きて、姑が起きてくると「おはようございませう」とあいさつをして「何をやりますか」と聞いて、御飯を炊いたり掃除をしたりした。姑にはなるべく動かない火を焚くような仕事をしてもらい、嫁は掃除などの立ち回りの仕事をするように気をつかった。米を洗う時なども、水加減は必ず姑にみてもらわなければならなかった。姑の機嫌を損ねてはならないということもあるが、それまで家で何もしていなかったの、聞かなければわからなかった。

#### 嫁の普段着

嫁としての初めての仕事は、茶碗を洗うことなどであった。里帰りが終わった次の日から長着にモンペをはいてマエダレをし、赤いたすきをかけて働いた。長着の袖は元禄袖であったので、水仕事をする時には、必ずたすきが必要であった。髪は8の字に結ってピンで止めたり、オサ

ゲドメでとめたりしていた。仕事をする時は、手拭いをかぶっていた。当時は割烹着を着るようなことはなく、よその家へ手伝いにでも行くような時だけ白い割烹着をして行った。

野良へ行く時は、縞のジバン（嫁の時はかすり）に帯をしめてハカマをはいて行った。帯も嫁の時は、赤い帯をしめた。ジバンもハカマも形は年齢に関係なくみんな同じなので、若さを出すためにはマエダレやたすきや帯の色や柄を工夫するくらいのものであった。

### 洗濯

仕事着などは、嫁に来る時に、当座は作らなくてもいいようにたくさんもつてくる。仕事着は汚れが激しいので、しょっちゅう洗濯をしなくてはならない。するときれるのも早い。普段ザブザブ洗う時は嫁家で洗うが、きれいなものは里へ持って帰って洗濯をして縫い直してきた。里へはモノビに毎回ではないが帰してくれた。モノビは一カ月に二回くらいあって、太鼓を打っては合図をしていた。毎月、月初めは休みになった。嫁に来たばかりの頃は、一カ月に二回くらい帰してもらった。

洗濯に持っていくものは、自分のものだけで、夫や子供のものは嫁家で洗った。自分のものは、作りかえたりしている暇がなかった。嫁に来て五年くらいたって、子供も二人くらいになると、ようやく自分のものの洗濯も嫁家でできるようになった。

嫁家では嫁に来た年の夏に、浴衣をつくってくれた。盆前であった。下駄も一緒に買ってくれた。長くいるようにとメリンスの浴衣をくれた。里帰りする時には、小遣いをくれた。休みで行く時には二〇〇円くら

い、正月は五〇〇円くらいだった。これだけではなかなか思うようなものは買えなかったが、近所の嫁さん同士で話してみると、他の嫁さんよりはずっと多かった。小遣いはおじいちゃんぐくれた。

また、仕事着は春先野良に出る前と、二百十日頃秋が始まる前に家中の者に新しいものを買ってくれた。

石鹼などは戦後しばらく配給制だったので、嫁はなかなか自由に使うことができずに、実家に行ってはもらってきたりしていた。固形石鹼だったので、姑がまず自分用のものをとってしまえば、嫁にまわる分はなかった。縫い糸なども同じであった。

### 衣類

着物としては晴着と普段着と労働着がある。

晴着にもいろいろあり、江戸袷は兄弟の結婚式などの式の時に着る。訪問着は式の時以外の呼ばれて行く時に着る。小紋は他所の家へ呼ばれて行くような時に着る。錦紗も小紋と同じような使い方をする。大島（縞）は黒の羽織の下などに着る。銘仙（縞）も大島と同じように黒紋付きの羽織の下に着る。小紋・錦紗・大島・銘仙をシマモノといった。親戚の祝いごと・出産祝い・遠い親戚の婚礼などの時に着る。このほかに喪服がある。

普段着としてちょっと出かける時に着る着物をツウヤギという。休みに里へ帰る時などに着る。シマモノとは柄で区別する。普通羽織をあわせて着ていく。そうしたもののほかは、木綿の長着に紺木綿のモンペをばく。寝巻はヒラソデの着物に下着を重ねる。長着の古やネルで作る。

夏は晒のジバンなどを着る。

労働着としては男女ともジバンに木綿縞や無地のサルツパカマであるが、真夏は男は木綿の半袖シャツにサルツパカマ。女は半キレジバンにサルツパカマをはく。

袷は野良の仕事を終えて冬至になると着る。彼岸過ぎになると脱ぐ。下着は晒の短いジバンでその上に長ジバンを着る。寒い時には晒のジバンの代わりにメリヤスのジバンなどを着る。長ジバンには半衿をかける。下体にはオコシを巻く。冬はネル、夏は晒のものを使う。男はサルマタ・越中ふんどしをし、冬はメリヤスのものもひきをはく。仕事をすると時には、下体に木綿の縞で作ったサルツパカマをはく。冬の間は男女ともに紺地で作ったモンペをはいた。寒い時には上体に綿入れのはんでんを着る。

モンペはサルツパカマより太めで、着物を着てはいてもゆっくり動けるようになっていく。一反で二枚取れる。小さい人で紐などを別にすれば、一反で三枚取れないこともない。

五月田を起こす頃になると、単衣物を着始める。真夏は女は半キレジバンにサルツパカマをはく。男は家作りの木綿の半袖のシャツを着る。

寝間着はヒラソデの綿入れの下に下着を重ねて着た。夏の夜などは晒のジバンなどで寝た。冬のコマ(暇な時)とか夏の土用などに布団の綿のブチカエシ(打ち直し―布団作り)や縫い物などをした。

夏は午後一時から二時頃まで昼寝をし、二時から四時頃まで綿作りをしたり縫い物などをして、干草の返しをしてその後四時から七時頃まで野

良に出て働いた。夕飯を食べて風呂に入れば九時頃になった。九時頃には寝た。

なお、Bさん(大正十四年生まれ)の夏の一日は現在次のようである。午前三時過ぎに起床、四時頃畑に行く。七時少し前に帰って風呂に入って朝食にする。朝食はおばんちゃがおつゆを作り、娘がおかずを作っておいてくれる。おばんちゃは五時に起きて掃除と食事の用意をしておく。朝食を食べながら洗濯機を回しておく。食事が済むと洗濯物を干して畑へ行く。一、二時間仕事をして帰宅し風呂に入る。一二時に昼食を食べて休む。午後四時頃、お茶を飲んで畑へ行く。七時頃帰宅して風呂に入る。日によってはこの時に洗濯をする。八時頃風呂から上がってビールを飲み夕食にする。九時頃テレビを見たりして風呂に入ったりして就寝する。日によってはテレビの番組などによって十時頃就寝することもある。また寝る前に娘と一杯やることもある。

#### いい嫁

いい嫁というのは行儀作法がきちんとできること。朝は姑より早く起きていて、姑が起きてきたらきちんとあいさつができること。他人にもあいそよく、ムラの人に会ったら手拭いはずしてあいさつができる。このようなことをうるさく注意された。手拭いをかぶったままであいさつをしようものなら、生意気だといわれた。

畑には姑と一緒に行って、教わりながら仕事を覚えた。お勝手の仕事と同じであった。姑は家風にあうように嫁をしこむのが務めであった。

また、昔の人は機織りができないと嫁にもらわれないといった。機の上

手な嫁は他所のものまで賃機を織って稼いだという。縫い物も羽織・浴衣・袷の着物などは縫えないといけなかった。そのうえ、姑に何でも相談するのがいい嫁だといわれた。

### 財布を渡す

家いえによって違うが、おじいちゃんが六〇歳くらいになった時が多い。六〇歳のトシイワイをきっかけにして、息子に譲る家が多いのである。従って息子は四〇歳くらいになった時で、嫁に来てから二〇年くらいたっている。

### 妊娠

嫁は子供ができたことがわかるとまず実家の母親に話す。実家の母親はなにげなく婚家を訪ね、姑に「こんなわけだからどうかよろしくお願ひします」とあいさつした。そうすると姑が産婆に連れていってくれた。産婆に行くと出産予定日を割り出してくれた。子供ができたことはあまり公にしないで隠しているのが女のたしなみといわれた。だから子供ができてそれほど喜びとは感じなかったという。

### イワタオビ

妊娠五カ月目の戌の日にイワタオビを締める。帯は婚家で用意し、産婆に巻き方を教えてもらった。

### 安産祈願

八月一、二、三日ごろにマチごとに祭りが行われる。それに先立って七月のうちに、オンバサマに御参りに行った。しかし御参りをしただけでお札などは貰ってこなかった。

### 出産

出産予定日の一〇日くらい前に姑が送ってくれて里に帰る。この時に二日分の米の代金と産婆に払う代金、かつおぶし二本くらいを持って送って行った。里に帰って出産するのは初めての子供の時だけである。里には五〇日もいるが、婚家で負担するお金は忌があげるとされている。二日分だけであった。残りの三〇日は実家で面倒をみた。

出産は奥の次の部屋であるナカマなどの部屋でした。以前は、産婆などは頼まず近所のトリアゲバアサンを頼んだ。産婆を頼むようになって、手のない家へは、隣近所の女衆が手伝いに行くこともあった。子供をとりあげることにはしなかったが、お湯あびせなどをした。

へその緒は産婆が切った。七日くらいたって落ちたへその緒は桐の箱などに入れて部屋の柱などに吊るしたり、しまっておいたりする。子供のお守りになるといって、子供が二歳から三歳になるまでしまっておいて、子供が無事に大きくなると川へ納めた。

エナはアトザンともいい、シュウトオトツアマが土に返すといつて自分の家の墓に埋めて来た。

### キワダ

乳をくれるまえにキワダをちよつと飲ませた。赤ん坊の胎毒を吐かせるためのもので、これを飲ませると黄色い水を吐く。胎毒を吐く前に乳をくれると、毒が出なくなってしまう。キワダは粉にしてあって、水にといてくれた。これは大人の胃薬にもなる。

乳が足りない時は、御飲を炊いた時にトリユをして、そこに砂糖を入

れて茶碗で飲ませた。

### オシチャ

生まれて七日目をオシチャという。この日生まれた子供を爺さんが抱いて自分の家のセツチンに行き、孫にお参りをさせる。セツチンに連れていくだけである。昭和二十年頃まで連れていっていた。

### 初正月

長男が初めて正月を迎える時に親戚から天神様の掛軸や破魔弓を貰った。女の子の時には羽子板を貰った。

### 魔除け

子供を外へおぶって出かける時は、子供の額に紅をちよつとつけて出かけた。魔除け・災難除けといって、子供をおぶっていくうちは必ずつけた。

また子供が三歳くらいになるまで、頭の横・前・後ろなどに少しずつ毛を残した。これをチンケといい、丈夫に育つように、魔除けだといわれていた。

### 大正時代の結婚をめぐる

Cさんは明治二十九年生まれで、一八歳で嫁に来た。

子供の頃、女は家庭を守らなければならないものであるから、六年終わると学校は終わったものだと思っていた。そして学校を出ると家の手伝いをして仕事を覚えた。もっとも、学校へ行っているうちも、学校から帰ると夜の御飯作りをした。竈で火を焚いて御飯を炊き、オツヨを煮た。オツヨの具には菜っ葉や大根を刻んで入れた。おかずは大根や白菜

の漬物が多く、それに夏は人參の葉っぱの柔らかいところを採ってきて一寸くらいに刻んで青水をもみ出して味噌で味付けしたものをよく食べた。これは特に田の草の頃よく食べた。ひやつこくっておいしかった。冬は納豆をよく食べた。納豆は自家製で、なくなると藁苞に入れてねかせて作った。

御飯は麦飯で弁当には麦のところを除けて詰めていった。弁当のおかずに味噌漬の大根二切れと塩ます一切れなどということが多かった。麦は身体の薬だからといって、かなり遅くまで食べた。嫁入りしてからも麦飯だった。

縁談は先方の親戚がオセワニン(お世話人)として話をもってきてくれた。親戚がもってきた話だからということで、相手のことは余り調べたりもしなかったようだった。ただ世話人からはいろいろ聞いていたようだ。世話人が他人だったりした場合は、聞き取りにくいこともあった。親が夫婦揃っているか等をまず聞いた。「夫婦揃っているし、まじめな家の子だからよかんべえ」等といって話を決めた。本人は親の言うとおりにするのが当り前と思っていたので、親に嫁に行けと言われれば、「はい」と言うとおりにした。子供のためを考えない親はいないから、悪い話のはずがないと思っていた。

相手がよさそうな人だから話を決めようということになると、親戚特に伯叔父母に相談した。この人たちが賛成せずに話がまとまらなかったという例もあった。親戚も良いということになると、「もらうべえ」「くれんべえ」ということで話を進めた。Cさんの場合はオセワニンが



仲人となって話を進めてくれた。

結納は婚礼の前日で、柳行李に花嫁様の荷物を詰めてニカチを頼んでかっいで行って納めて来た。Cさんの場合は、代々の花嫁衣裳と黒とねずみ色の式服が届けられた。ニカチにはムラシンセキを頼んだ。

婚礼の当日は、午前中に嫁の家にお客が嫁を貰いに来た。ヨメモライノキヤクなどといった。婿・婿の兄、伯父などが来た。Cさんの時には人力車を連ねてやって来た。客は座敷でお膳について宴会をしたが、この時の御馳走は家で賄った。御馳走の残りは菓の苞に入れて持ち帰るが、この苞に頭付きの鱒を縛り付けて持ち帰った。この苞はニカケ（ニシヨイ）がまとめてかっいで帰った。

夕方婚家に着くようにと時間を見計らって嫁の家を出た。嫁の家からは行列を作って歩いて来た。嫁にも男兄弟・伯叔父母などがついてきた。村に入るとナカヤドといって親戚の家などに一度入って休み、式服に着替えたりした。Cさんの場合は、仲人が村の親戚だったのでそこをナカヤドにした。嫁は支度をしてくるが、ほかの人たちはモンペなどをはいて来るので、それを脱いで袴などに着替えた。ナカヤドでは餅を出してくれた。きなこ餅やあんこの餅だった。支度のできた頃を見計らって「ナナタビのお使いに上がりました」といって、弓張り提灯をつけた迎えの者がやって来た。迎えの者を先頭にして嫁以下が行列を作って婚家に行った。

嫁は婚家のトマグチから入った。トマグチを入ると手伝いの人たちが皆寄って来て見るなかをナカマ（勝手）に上がってトリムスビ（三三九

度の盃）をした。嫁婿が向かい合って盃をしたのである。お酌は兄弟のうちの子供を頼み、この子供をサケツギなどといった。兄弟にちょうどいい子供がない時は、昔からの親戚の子供を頼んだ。盃を始める前に嫁婿の間に三宝島台を置いた。島台はムラで買って区長が管理していた。今は全く使うことがない。盃の間、客は嫁・婿のまわりを囲んで見守っていた。盃が済むと、嫁はこの家の者になったということで仏壇にお参りした後、座敷の席につき、披露宴が始まった。

披露宴の始まりには、ムラの若い衆が高砂の謡をうたった。この謡が出ないと披露宴にならなかった。若い衆は高砂に始まる謡を順々にうたっていく。そのために若い衆は冬の間に謡の練習をした。謡の次には地式の歌（民謡のようなもの）が出て、宴に賑やかになっていった。

婚礼は夕方から行われ、披露宴は三時間くらい続いた。宴が終わると仲人は下がって手伝いの人たちにあいさつをした。嫁は宴の途中で下がって別の部屋で休み、客が帰る時には出て来てあいさつをしてトマグチまで見送った。手伝いの人たちが帰る時にもトマグチまで見送った。客が帰ってしまうと嫁は支度をとって休んだ。しかし、客は一斉に帰ってしまうわけではなく、親しい親戚などは残ってニワの方で飲み直したりしていた。

婚礼の翌日は、嫁は髪を島田に結い直してムラマワリをした。嫁に来る時にはイタワといって潰れたような髻を結っている。この日に初めて島田に結う。衣裳は嫁に来た時と同じ着物を着て回った。本家・分家などのオバサマに連れて歩いてもらった。ムラはシモ・ナカ・カミに分か

れているが、その中の親戚を順に回ってあいさつした。ほとんどの家を回ることになった。終わると着物を着替えて台所仕事を手伝った。この日はゴタイギブルマイといって、手伝ってくれた人たちを呼んで、オマエの間で御苦労をねぎらった。婚礼や葬式の手伝いはユイッコで行ったが、いずれの場合にも終わったあとはゴタイギブルマイをした。

婚礼の翌々日は家だけで後片付けをしたり、オリョウリニンサマとオカマサマを呼んで御馳走して慰労をした。オリョウリニンサマは婚礼の料理全般を家の主人と相談しながら取り仕切る人で、献立の大筋を決め、主な料理は作った。Cさんの時には五軒に頼んだ。オカマサマは女の手伝いの中で年長者二、三人を頼み、台所の細々したことを仕切ってもらった。「御飯はなんぼたかにゃなんねえ」とか「おつゆは何にする」といった細かいことを決めて仕事を進めた。この日、嫁は台所の仕事をした。

イツツメ(五日目)には嫁は里に帰った。オジチャとオバンチャがついていくのが普通だったが、いなかったのが両親がついて行った。里へ帰る道は幾通りもあったが、Cさんはこんな方へは嫁入りの時に初めて来たので何処を行ったらいいのか知らず、舅に任せて帰った。わずかに里余りの道程でもわからなかった。里では伯叔父母をおとりもちに呼んであって御馳走をしてもてなしてもらった。両親はその日のうちに帰り、嫁は二晩泊まって帰った。帰りにはやはり祖父母が送って来るはずであるが両親が送って来た。マゴヨメの行った先を知らないようじゃいけないというので、婚家では祭りの時にシュウトジイサンを指名して招待した。

里はタドコ(田所)で水田ばかりだったが、婚家はサイバ(菜場)で、田をうなったり、畑をうなったりするのに馬耕でしていた。里ではすべて手で行っていたから、婚家の方が身体は楽だと思った。畑は砂地で起こすのにも楽であったが、畝など作ったことがなかったから最初のうちは人のやり方を見て一所懸命覚えた。一年、二年とたつうちに段々に人に負けないようにできるようになった。最初のうちは身体は楽でも仕事一人前にできなくて辛かった。

里では田植という人と人を一〇人くらい頼んで二、三日で植えてしまった。植えるのにもジョウバンで筋をつけておいてハイヨーハイヨーと追いながらどんどん植えて、夜も遅くまで植えていた。婚家ではジョウバンを使い始めたところだった。

田植の仕方には手植え・ジョウバン・スジヒキ・機械田植がある。手植えというのは、八寸くらいの間隔で巧い人が先に立って勘で植えていくものであった。ジョウバンというのはジョウバンで筋をつけてそこに植えるものであった。スジヒキというのは、八寸間隔に杭を打った大きな熊手のようなもので縦横に筋をひき、その筋の交わった所に植えるものであるが、タドコでは九寸間隔であった。機械田植は昭和末頃から盛んになってきたが、それと耕地整理とは深い関係にあった。一反田の整理は明治中頃から始められ、昭和の中頃からさらに三反田に整理されるようになった。現在はさらに大きくして五反田にしようとしてきているが、機械田植によって田が大きくなっても田植がそれほど苦にならなくなったのである。機械田植は畝間を広く、苗と苗との間を狭く植えるのが特

徴である。

ムラで決めてあったヤスミビには洗濯や針仕事をした。ノバカマ（サッパカマ）やハンコを作った。今はズボンの人も多い。

野良に出る時にはハンコにサッパカマをはいていった。タドコの里では土だけの道だったので家から田まで素足のまま歩いたが、ここでは砂利道なので家からわらじをはいていった。わらじは素足にはいた。家に帰ってくると長い着物にマエカケをした。ただし夏などは腰巻にハンコの着物を着てマエカケをした。ハンコの袖はサツマスツポで袂がひらひらしたのではなく、働くのに邪魔にならないように作った。マエカケは一幅半の幅に二尺の長さのもので、紐は四尺五寸にして後ろで交差させて前に回して縛った。着物の端切れなどで何枚も作っておいた。

野良へ行つてくると、ノバカマなどは川でザブザブ洗って干しておく。夏などは昼休みのうちに乾いてしまった。洗濯の時に、さいかちの実を拾ってきてみ出して汗を出し、その汁で洗うとよく落ちるといわれた。Cさんの頃には石鹼があったのであまり使ったことはないが、何かは使ってみた。石鹼以上につるつるしてよく落ちるし、白い物は白くなる。生地も痛まなかった。しかしこれは食器洗いには使わなかった。食器を洗うのに洗剤などは使わなかった。油のものなども何度か洗っているうちに、油が自然に取れた。

## 四 生活暦の展開

### (一) 生業に伴う生活のリズム

#### 春彼岸

春の彼岸が過ぎると雪が消えて畑仕事が始まる。畑をクルメテクルなどといって麦畑の中耕をしたり、菜種を蒔いたりする。また水田でも彼岸前に雪どけ水で土をねって畔につける。これをクロツケという。

#### 四月八日

この日を清明ともいう。磐梯山の頂上に虚無僧が尺八を吹いているような残雪になったり、大川の向こうに見える西山にウサギユキが出る。これを目安に畑をうなつて夏野菜の苗場の準備をする。なす・きゅうり・トマト・すいか・あまうり・かぼちゃなどの苗場である。

#### 四月二十九日

かつての天長節である。この頃にはお城の桜が満開になる。その桜を見て苗代作りをする。苗代は暮のうちになつておく。苗代を作った時に、苗代にヨシを一本立てておく。これは苗取りの済むまで立てておく。

#### セツク

五月五日の節供が終わると田の馬耕をする。たがやす時には牛と馬が半々くらいであった。田植前にクラカワに馬を借りに行った。一五、六人まとまって馬を借りてくるのである。五月二十五、六日頃から田に水を入れる。

サツキ

田植をサツキという。六月三、四日頃から行り。代かきも入れて二週間くらいかかった。田植には材木町などから人頼みをした。五、六人を三日くらい頼んだ。親方がいて親方に声をかければ人数を揃えてくれた。朝から一杯出して働いてもらった。

田植の献立は、朝は御飯・くきたち（春の菜の葉を干しておく）を茹でて水にもどして炒めたもの・にしん・おつゆ・納豆である。納豆はサツキ納豆といって田植のために作る。糸が出ないと駄目である。煮た大豆を藁で作った苞に入れる。二〇個から三〇個作る。一晚で熱を出さないと失敗する。熱が出たところであんかを抱かせる。温度は勘で調節する。かますの中に入れて、上に重石を置いて、つゆのつき具合で温度を見る。三日くらいででき上がる。漬物も食べる。漬物はたくわん・白菜・粕漬け（なす・にんじん・きゅうり）などを作る。たくわんや白菜は十一月の終わり頃に漬ける。たくわんは六人家族で一〇〇から一五〇本漬ける。粕漬けにするなすやきゅうりは盛りの際にもいで塩漬けにしておき、蔓あげをする頃になって塩出しをして粕に漬ける。

昼は御飯・味噌汁・塩びき・さつまあげとあぶらげの煮付け・山東菜（春先、サツキのヨイに蒔く）のおひたし・ささげの煮付け（去年とったささげを甘く煮付ける）・納豆。

夜はタマゴアゲ（卵焼き）・煮魚（ひらめなど）・ナマリ（節）を上に入れた煮物（えんどう豆・玉葱）・漬物・納豆。

午前と午後一回ずつあるタバコ（お茶）休憩には、パンなどを軽く

食べ、お茶を飲む。ゆで卵、菓子等も用意する。

お勝手の賄いも人を頼み、嫁は田んぼに出て手伝いの人を指図する。嫁に来て二、三年で指図するようになる。特に稲の種類を間違えないように植えてもらったりしなくてはならないので、女は手伝いの人と一緒に気を配っていなければならない。特に糯とうるは一緒にならないようにした。男は大まかな指図をし、苗運びなどをする。しかし本格的に人をつかうのは男の仕事であった。

家の人は朝四時頃には起きて田植の準備をする。六時頃から植え始めて、夕方暗くなる少し前くらいまで植えて、一人一日一反植えることができる。一人前と言われた。一人で八寸幅の畝を五本もって植える。

マグワアライ

田植が終わると各家々で田植の終わった祝いをし、これをマグワアライ・マンガアライなどという。エンポリとマグワに手苗一把と御神酒・餅を供える。アサシゴトといって朝五時から八時頃まで仕事をするだけで、あとは風呂に入ったりして一日ゆっくり休む。この日には頼んだ人たちを招いて餅をついて御馳走をする。餅はあんこ餅にしたり、きなこ餅にしたりする。餅のほかに刺身・タマゴアゲ・煮魚・コヅユなどを作る。コヅユは里芋を小さく短冊に切り、にんじん・きくらげ・しいたけ・はたて・イトコン・マメブなどと共に煮た汁である。

オサナブリ

ムラ中の田植が終わった頃、オサナブリといって農休みをする。大体七月二日の半夏の頃である。二日くらい休む。オサナブリの翌日はコヤ

スミという。風呂に入ったり、用足しに行ったりして野良には出ない。映画を見に行くのもこんな時だった。嫁に来て四、五年しかたっていないキガケノヨメは小遣いを貰い、菓子を手土産にして里帰りし、二晩泊まってきた。オサナブリは正月・盆・アキが済んだ時などと共にセツと呼ばれる。神指中が休むオサナブリもある。

### 田の草取り

田の草は三回とった。一番除草はタグルマを押し、二番除草は手どりをした。三番除草はアゲグサといい手どりであった。アゲグサは七月二十六日をめぐとした。

### 二百二十日

イネカリは二百二十日過ぎで九月十日から十月十日頃である。刈り上げの時にはカッキリモチをつけて神棚に供え皆で御馳走になる。カイモチを作って食べる家もある。カイモチは糯米と粳米とを半々にして炊いて、つぶして丸めてあんこなどを付けたものだが、この時には忙しいので、茶碗に盛ってあんこをかけて食べる。お彼岸などには丸めたカイモチを作る。

稲抜きが終わるとアキモチをつき、嫁はその餅を持って里帰した。大体十一月三日頃であった。新米で炊いた御飯は神棚に供える。

### 秋彼岸

秋の彼岸前に夏野菜の収穫が終わり、カゴアライといってお祝いをする。出荷組合が中心となって慰労会をする。市場関係者や問屋があいさつをする。会費制である。

麦はこの秋の彼岸頃にバラマキでうねに蒔く。下肥を田一面にフリツケにする。十月末頃に移植する。麦苗のうねを鍬の刃の片方でさくる。麦は二〇センチメートルほどに伸びている。それをとって丸ける。鍬の刃でキタテた所に麦を一〇本くらいずつ植える。植えた麦はよくとれるという。畦と畦との間をさくって下肥をしてクルメる。土寄せをするのである。これを麦クルメという。

### 十二月八日

アキが終わると十二月八日頃嫁の里では餅をついて嫁を呼んでくれる。二泊してくる。婚家に帰る時は、里の家から丸めたお重ね餅に塩びきを付けたものを持たされてきた。

ムラ中がアキが終わった頃アキモチをつく。この日は青年会が決め、太鼓を打ってムラ中を回って知らせる。ムラの真ん中辺りにある古峯様のところにも案内板を出す。コクバンと呼んでいる。太鼓はムラの外側を回って歩き、終わると次の当番に回す。当番が太鼓を管理する。田植後のオサナブリにも同様にして知らせた。神指中が休むオサナブリも青年団が指示を出した。太鼓で農休みを知らせる方法は五年くらい前まで行われていた。

### 冬至

野菜の始末は冬至の頃までに終わらせた。馬の草を合わせるのも冬至までに済ませた。馬の草は、夏草を干したものと豆がらとを混ぜて与えた。正月は二十日正月まではゆっくり休んで仕事をしない。旧正月(二月)になると薬仕事をしたり、野菜取りなど、正月前にできなかったことを

始める。冬の間も野菜出しは行方。スコップで三回くらい雪をどけて葱を掘り、清水で洗って出荷する。大根などはアキのうちにこいでまどめて埋けておく。一日か二日おきに出荷する。野菜を出荷してしまうと、女は作業小屋で薪を焚いてかます織りやむしろ織りをした。しかしこれらは昭和五年頃から機械で織るようになった。

女は冬、朝五時頃に起きて、炭を起こしたつに入れたりして、子供の弁当を作り、御飯を作りながら勝手の掃除を済ませる。七時頃に朝御飯を食べた。夜は九時頃までヨワリ(ヨナベ)をした。針仕事がほとんどだった。

### ヨーカサマ

ヨーカサマといって毎月八日は休みである。

このほか、青年会が定休日を作り、太鼓を打って休みを知らせた。昭和六十三年三月に定められた「昭和六十三年度定休日表」によると、昭和六十三年度の定休日は次のとおりである。四月二・十・十七・二十九日。五月三・四・五・七・八日。六月四・十一・十九・二十五日。七月二・十二・十七・三十一日。八月七・十・十五・十六・十七・二十・二十三・二十四・二十五日。九月九・十五・二十三・二十四(小休み)日。十月十・十六日。十一月三・五・十三・二十三日。

### (二) 年中行事

#### モチツキ

十二月二十八日。餅つきは二十九日は避ける。八升臼で三臼ほどつく。

この時にオソナエをとる。神棚・床の間・年神様に供える大きなものは三重ね。水神・竈神・えびす大黒・仏壇・蔵・雪隠などに供える小さなものは一五重ねほどとり、トストリに飾る。

シメナワもこの日に作りトストリに飾る。シメナワには松・ゆずりはなどをはさむ。シメナワは神棚のお神宮・オカマサマ・スイジンサマ・ヤシキイナリなどに張り、家の入口にも張る。K家の神棚には大神宮を中心に左に金毘羅、右に天神・市神を祀り、棚にはオキアガリサマが供えられている。神棚の右上にエビスサマ、左手に住吉・出雲・大山祇・諏方・神明・古峯などのお札が祀られている。

### 大晦日

オオミソカにはザクザクを作る。味噌汁に粕を入れ、そこに鮭を入れる。そのほか里芋・にんじん・大根・ごぼう・なすなどを入れる。なすは小さななすを干したもので稔りの時にとっておくのである。鮭はお歳暮などで送ってくるが、昔は魚屋へ行って買ってきた。

子供が生まれて初めての年の暮れには、嫁の里のオジ・オバなどが天神様の掛け軸とともに、男の子には破魔弓、女の子には羽子板を贈る。こうした贈り物や答礼や近所のつき合い、家の中の経済的なやり繰りなど所帯のきり回しのことをセワマワシという。嫁がセワマワシをするようになるのは、子供が中学生くらいになってからで、それまではすべて姑の指図に従う。

大晦日などに「来年からウチの方をやるように」などといってセワマワシを渡される。

年の暮れから正月になると万才が回って来た。各家の門口で太夫が舞い、その間に才藏が米やお金をもらった。昔は茶碗に一杯くらいの米をやるが多かった。後にはみな金一封になった。

## 元旦

朝、井戸から若水を汲む。米を撒いて「ナニクム ヨネクム ヨロズノタカラ クミアゲル」と三回唱えて汲む。この水でお湯をわかしてお茶を入れたり、御飯を炊く時に使ったりする。

また、元旦参り・元朝参りといって、元旦に七カ所を参拝して回る。

Bさんの巡拝の順序は、屋敷稻荷―古峯ヶ原碑（下）―金毘羅様碑―秋葉様碑（上）―熊野神社―新城寺―二本木稻荷である。熊野神社には区長と当番三人が詰めている。新城寺は本堂の扉を開けておく。

元旦から三日まで朝は雑煮を食べる。里芋・椎茸・糸コン・にんじんなど五品を入れて作る。きくらげや貝柱なども入れる。餅は切餅で焼いて入れる。つゆは醤油味にする。普段は味噌汁であるが、祭り・正月・ふるまいなどの時には必ず醤油味のつゆを作る。お汁粉にする日もある。三ヶ日は朝夕の二食で、元旦はそば、三日はミツカトロロといって芋汁を食べる家もある。

## ナナクサ

一月七日。七歳の子供のいる家ではナナクサガユを食べる。

## 十日市

一月十日に若松の町で市が開かれる。町の中央に露店が出て会津地方一円から人々が集まる。その市でダルマ・風車・オチャカリなどの縁起

物を買ってくる。ダルマは家によってはだんだん大きなものを買うものだとしている。オチャカリ（起き上がり）は家族の人数に一加えた数を買ってくる。古くなるとサイノカミに持って行って焼やす。

## 祭文

一月十二日に祭文語りを招いて新しく嫁取りをした家に村中の人が集まって祭文語りを聞いた。新しい嫁はいい着物を着て、村人と一緒に祭文語りを聞いた。

## モチノシヨウガツ

一月十四・十五・十六日の三日をモチノシヨウガツという。大晦日と同じような御馳走を作って食べる。この日の食事は男が作ることにしている。献立は、つゆ・豆カズノコ・昆布巻き・新巻きの魚・にんじんと大根の酢のもの・ザクザク・粕汁である。粕汁は大根と鮭を具にして味噌汁のように作り、粕を入れる。鮭は魚屋から買ったか、お歳暮に買ったかしたものを使う。

十四日の早朝、二時か三時頃トリオイをした。子供たちがトンシヨに集まり拍子木をたたいて村の外周を回る。このとき「カラス（スズメともいう）ノアタマ ハツニワツテ コーダラニツメコンデ アーラホー コーラホー サンドガシマン（隣村の名をいうこともある）ホーイホーイ」とうたった。昭和十年頃まで行っていた。

十四日の朝早く、正月の飾り物を下げてからダンゴサシをする。山の人がかついだり車に乗せたりして売りに来るミズキ（ワカキ・ダンゴノキという）を買い、売りに来るセンベイなどをダンゴとともにつける。

米の粉をこねてダンゴを作り、ミズキの芽という芽にみなダンゴを刺す。芽をあけておくとサツキに苗が足りないといわれる。昔は赤・青・黄などで色をつけてダンゴを作ったが、今はえびす・大黒・大判・小判などの出来合いの飾りを買って結びつける。終わるとはずして来年使うようにしまっておく。ダンゴのほかに米の粉をこねたもので蛇(細長くのばして頭の部分に目を墨で入れとぐるを巻いているようにする)・鶴・亀・巾着・狐などを作り、ダンゴサシをオマエの間の柱に飾ってから、枝の分かれ目のような所に乗せて飾る。蛇は金神様、狐は作神様で稲の穂をくわえて来てくれるという。狐はアキノカタを向けて飾る。他のものは縁起物だという。ダンゴサシを飾った左右にセージ観音とサツキの掛軸を飾る。サツキの掛軸には一年間の稲作の様子を描かれている。この掛軸はモチノシヨウガツが終わるまで三日間飾っておく。ダンゴサシは小枝も何本か作り、蔵・便所・オカマサマ(御飯を炊く所。昔はいろりのオカギサマに又になったごく小さなものを刺した)・オセージンサマ(水神様)などに供える。このほかモチノシヨウガツには丸めた餅ではなく、のした四角な餅をオブチと呼ぶ真鍮(昔は瀬戸物だった)の器に入れて供える。ダンゴサシは十九日におろし、二十日に川に納める。

十五日に青年会が中心になってサイノカミを行う。ムラ中から藁を集めるとともに、古い縁起物やシメナワ・神棚のお札などを十日市の頃に大川の河原のサイノカミの場所に持って行く。十五日の朝、青年が触れとともに集まり大川端の雑木を伐る。それを芯にして河原に大小二つのサイノカミを作り、それを注連でつなぎ二見ヶ浦(のよう)にする。夕

食後青年会が大きなサイノカミから火をつける。燃えたサイノカミのあとかたづけは青年会が行い、燃え残りの木は集めておいて金毘羅様の焚火にする。

一月十七日

キナガシに馬頭観音があり各自でお参りに行った。

一月二十日

ハツカシヨウガツでダンゴサシを川に納めた。

二月一日

百万遍をする。浄土会ともいう。団子を作り、煮物を重箱に入れて持ち寄る。

節分

豆撒きをする。セツチンやウマヤにも撒く。

初午

稲荷の祭りで稲荷社を巡拝する。

二月八日

モチコウをする。餅つきをするのである。女は会津三十三観音の観音講をし、男は伊勢参り仲間伊勢講をする。これはヨウカコウという。

雛祭り

三月三日。お雛様を飾り、テーブルに甘酒などを供える。初節供には雛人形をお祝いに貰う。お祝いをくれた家の人を招いて御馳走をする。御膳を用意し、記念品を出す。御馳走は今仕出しのものを使う。菱餅を作ってお祝いを贈ってくれた家すべてに配る。昔は白だけだったが、



だんだんに紅白の菱餅を作るようになった。

### 彼岸

春の彼岸には獅子舞が来て舞った。東神指・東山の院内・小松などに獅子を舞う人がおり、それぞれの縄張りを回っていた。三人一組でやって来て家々を回った。米やお金をやった。旧家では座敷に上げて舞ってもらった。彼岸獅子といった。

### 高山様

四月十七日。この日を高山様といい、明神ヶ嶽の小高い所にむしろを敷いて参拝し、飲食をした。

### 五月節供

五月五日。初節供の時にはノキザキ(軒先)や窓に藁一本で束ねたシヨウブとヨモギを下げる。男の子の初節供をコバタイワイといい、武者人形を貰って飾る。そして紅白の菱餅を作ってお祝いを贈ってくれた家にお返しとして配る。嫁の里からはコイノボリを貰う。

### 百五

節分から数えて一〇五日目をいう。五月十九、二十日頃になり、この日を別れ霜といい、霜の恐れはこの日を過ぎるとないという。季節の分かれ目である。

### 天王様

六月一日・十五日には天王様にきゅうりをあげる。旧六月十五日には終わったきゅうりを持って行って供える。きゅうりは六月一日にはもげ

### 雷神様

六月六日に雷神様といって雷神様の祠にお参りした。

### 半夏

半夏になると暇になるので旅行をする。昔は半夏の日に郭内になすを持って行けば、侍の奥様方が出てきて競って買ったという。なすはアイズコナスあるいはシンクロウと呼ばれるものなどであった。なすは縁起ものであるという。「ナシ(ス)タリ カスタリ」といい、また「借りたものをなす」ともいう。

### 墓参り

八月十日。寺からハカジヨウ(板塔婆)を受けて村中の家の墓に供える。このハカジヨウを子供たちが集めて寺の床下に入れておく。これを十四日・十五日・十六日に墓地で燃やして、試胆会などをする。

### 盆迎え

八月十四日朝ムカエビといってマメガラを門口で焚く。ムカエビは十三日頃に子供が門口にひらたい丸石を三つ四つ持ってきて竈のようなものを作り、そこで焚く。夜はハカビアカシをする。小さな提灯に火を点して墓に行き火を見せてお参りしてくるのである。何処の家でも大体出ていく時間が同じであるので、提灯の明りがきれいである。ハカビアカシは十五日・十六日にも行う。

### 送り盆

八月十六日。盆提灯を飾る。仏壇の前に竹を立ててワカメを吊りソーマンをかける。スゲのゴザを買ってきてそれを敷いて供え物をする。供

えたものはゴザに巻いて大川に流す。ナスウマに背負わせてやるという。盆踊りは七日町の観音様の辺りで行い、皆で出かけて行った。

### 地藏様のお祭り

八月二十三・二十四・二十五日がお寺の地藏様のお祭り、親戚が呼ばれて来る。これがムラで一番賑やかなお祭りである。

### アキノセック

九月九日。熊野神社のお祭りで、一軒から一人ずつ出してお宮に参拝する。各家では餅をついて食べる。

### モチコ

十一月八日。餅つきをする。

### 大根の日

十一月二十日。エビス講ともいう。この日は大根がくびれる程育つという。盆暮勘定でついで買って買ったものについては縁起的に清算をする。実際の決算は暮れにした。商店に清算しに行った帰りに鮭を買ってきた。鮭の頭と尾をエビス様に供えた。また神棚に葉付の二股大根を一本供える。

大根はこれより前、雪の降る前にとる。注文を受けて酒屋などに売るとった大根を洗って一〇本ずつにまるけて持って行く。酒屋には新潟などから来た杜氏がいて、その人たちの食べ物になる。

### ㊦ 生活のリズム

年間を通して行われる行事等を中心として生活暦を作ってみると、表

2 のようになる。

こうして見ると生活の推移について、その目安になる日がほぼ決まっていることがわかる。それは暦法によるものと自然の変化に対応するものである。つまり冬の始まりとしての冬至。これは秋の仕事がかたづいて冬の仕事に移行する目安になる日であり、それとともに正月準備に入る日でもある。そしてこの冬は三月下旬の彼岸まで続くことになる。その間、身にまとうものは袷である。したがって袷は冬を象徴しているということになる。もちろんこの期間が同一の性格をもって推移するというわけではない。暦日の十二月晦日と一月一日との間には年が改まるという大きな断層があり、暮れの勘定を済ませて正月を迎え、一月は仕事を休むことの多い期間である。そして一月には正月にかかわる様々な行事が行われる。これらは二十日正月で一応終わるのであるが、生活自体は正月の延長として営まれる。二月以降春彼岸までが冬の室内での仕事ということになる。しかし現在では野菜のハウス栽培などが行われており、こうしたリズムは崩れてきている。

冬至に続く目安になる日が春彼岸である。ここから本格的な農作業が開始される。その農作業の展開の目安になるのは自然の変化であり、暦日とはそれ程対応していないということもできる。その際注目されることは、野菜にかかわる目安が多いことで、野菜場として生計を立て、生活を営んできたという地域の特性をよく示していると思われる。もちろん稲作にも、クロツケ(彼岸前)、苗代作り(桜)、田うない(五月節供)、稲刈り(二百二十日)というような目安がある。しかし野菜栽培にも畑

中耕、菜種播種（彼岸）、野菜の苗場作り、畑うない（残雪・雪形）、植えつけ（百五）、半夏なす（半夏生）、カゴアライ（彼岸）などというものがあった、作業ごとの目安となっているのである。そしてこの春の彼岸からの生活は、ほとんど農作業に追われることになり、その生活からは、季節を明確に示すものを取り出すことはできない。

つまり春という季節はどのように考えられるかということである。それは着る物からすれば袷から単衣物になる期間ということであろうが、これは田うないという作業を目安にして着用されるのである。しかし季節的なものとしては、節分から数えて一〇五日目の百五が別れ霜であるといつて、この日を目安にして夏野菜の植えつけをするのである。つまりここから夏ということになる。夏の認識が二重になっているといえる。それでは夏はいつまでかということになるとこれも明確ではない。もし夏の着物として単衣物を位置づけるならば、十一月末まで夏ということになる。しかしこの期間にはアキが行われ、アキモチも作られているのである。とすれば、地藏縁日を目安として単衣物に替わる時が季節の変わり目か、二百二十日を目安に行われる稲刈りを目安にするか、あるいは彼岸を目安にして夏野菜の収穫が終わるカゴアライの行われる時を目安にするか、はっきりしないのである。

そして冬の準備としての漬物、あるいは嫁の里帰りとしてのアブラシメ、これらはまた秋と冬の境い目において行われた仕事である。その期間は秋ともいえず冬ともいえない移行の期間ということができよう。

着る物の展開だけを見ると、袷―（間）―単衣―真夏着―単衣―（間）

という展開であつて、こうした着物の着用の展開自体は他の地域と大きく相違するものではない。ただそれがいわゆる四季とそれに伴う生活と必ずしも整合しないということである。それは特に野菜の栽培が盛んに行われ、近郊農村としての性格によるものであるかも知れない。あるいはまた、その地域から見ても単衣は春と秋とを示していると理解した方がよいかも知れない。すると冬が長い生活であるということになる。こうした点については会津地方の他の集落の資料と比較してみることも必要になる。また衣類だけではなく、生活暦全体から検討しなおすことも必要であろう。

追記 なお本調査に当つては多くの方々の協力を得た。特に幕内においては、話者として木村弥氏（大正四年生まれ）、佐瀬林之助氏（大正四年生まれ）、木村とく氏（明治二十九年生まれ）、木村ハツミ氏（大正六年生まれ）、佐瀬すみ氏（明治四十年生まれ）、佐瀬寿江氏（大正十四年生まれ）の諸氏には一方ならぬお世話になった。また、調査は谷口貢氏、倉石あつ子氏の御協力を得た。記して篤く御礼申しあげる。

（国学院大学文学部 国立歴史民俗博物館共同研究員）

幕内の生活暦

6			7			8			9			10			11		
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
			半夏								彼岸					降雪	
衣	物			半キレ	ジバ	ン・サ	ルッパ	カマ		単		衣		物			
←	田植え	→	→	←	→	←	→	←	←	→	→	→	←	→	→	→	→
		マダワアライ(家)	コヤスミ オサナブリ(村)・半夏ナス		アゲグサ(田の草)				稲刈り		カゴアライ・麦まき	稲刈り・カッキリ		麦移植		アキモチ(稲コキジマイ)	大根とり
6 雷神さま	15 天王さま				23・24 祭礼(地藏)	10 墓詣り	14 盆迎え	16 盆送り	23・24 延命地藏縁日	9 熊野神社祈願祭	二百二十日二本木稲荷祭り				8 モチコ	20 エビス講	
																	勘定

表2 会津若松市

12			1			2			3			4			5		
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
	冬至					初午						彼岸・雪消え	虚無僧尺八 うさぎ雪	桜満開			百五の分かれ霜
						裕											単
アブラシメ		針仕事	正月休み			針仕事・ワラ仕事						麦畑中耕・菜種播種 クローンケ	畑うない 夏野菜の苗場作り	苗代作り	田うない		夏野菜の植えつけ
	正月準備	28 餅つき・シメナワ	17 ナクサガユ 1元朝詣り・若水 3 三日トロロ	14 トリオイ 19 ダンゴをオロス 20 二十日正月		1 初午 稲荷祭り 8 モチコー・八日講			3 10 コンピラサマ 三月節供				10~15 春神楽 17 高山さま			5 五月節供	
<p>14~16 モチノ正月 12 サイモン 17 厩山詣り</p> <p>休み日 毎月1日・8日・15日・20日あるいは25日 ヨーカサマ(8日)</p>																	

## Folk Customs of Makunouchi in Aizu-wakamatsu City

KURAIISHI Tadahiko

Makunouchi is an agricultural village in the suburbs of Aizu-Wakamatsu, the castle town of the Lord of Aizu. Therefore, the daily life of the village has been closely related with the town. Vegetable cultivation was extensively carried on in the village, which was once called the kitchen garden of the castle town, and even today, vegetables are its principal products.

Formerly, people used to go every morning to the town and sell their vegetables in baskets. After the Meiji Revolution, people acquired lands previously owned by the town, and started rice cultivation. Today, these lands have been turned into residential areas, and some farmers of Makunouchi manage apartment houses, showing not themselves to be only producers but also enterprisers. It can be said that, at all times, the people of Makunouchi village have been closely concerned with the outer world. They have been sensitive to the movements of society, endowed with an enterprising spirit, and highly interested in learning. It was on this basis that "Aizu Nosho" (Book on the Agriculture of Aizu) and others were compiled.

In the religious life of the village, the Shinjō-ji Temple (belonging to the Jōdo Sect) has played an important part, together with cult of Inari (the god of harvests). The village has dedicated the Nihongi Inari Shrine, and not a few families have erected a shrine dedicated to Inari in their grounds. Formerly, the religious associations "Konpirakō" and "Kominegahara-kō" were very active. Men's groups for trips to Ise and a women's counterpart for tours in Aizu played an active role not only in the cult, but also in communication in their daily life.

Young wives who came to the village on marriage participated in the Aizu tour group as a start to their new lives in the community. These young wives, dressed in their Sunday best, attended the "Saimon-Gatari" (recital of address to the deities) held on January 12, to be introduced to the people of the village. Their lives were deeply involved in the production and sale of vegetables, as well as household affairs.

The development of village life was based on dry field farming. Also links with town life, such as the "Tōka-ichi" (markets opened on the 10th, 20th, and 30th days of the month) and the Ebisu-kō (fête in honor of Ebisu, the god of wealth) have marked their lives notably.

Admitting that the geographical conditions of the Aizu Region have largely controlled life in Makunouchi, it seems that being a suburb of a city has exerted much more influence.